

都留市史

通史編

戦後における学校教育の体系が単線型の六三制に切り換えられたことから起こった問題の一つに、教員不足がある。昭和二五年十一月の山梨日日新聞には、「郡内人の教員養成へ」という見出しで、教員のなかでも芸能系と体育の不足教員の問題と郡内の教員志望者が少なく、授業にも影響が出ていると指摘している。こうした状況に対応を迫られていた山梨県の教員委員会は、昭和二八年正月に谷村町に県立の教員養成所設置を決断している。その後も、山梨大学などの関係機関との調整も続けられたが、県立臨時教員養成所が谷村高校内に設置されることになったのは同年五月のことである。所長には山梨県教育長が就任し、学則によると入学資格は高校卒業程度で、一年間の修業で授業料はなく、定員は五〇名以内である。この臨時教員養成所の最初の卒業生が翌年春にでたときに、その殆どが郡内各地の僻地勤務を希望して地元を喜ばせた。

この谷村町の県立臨時教員養成所の設置をきっかけに、やがて恒久的な高等教育機関としての短期大学設置へと展開していったのである。昭和二八年八月の南都留郡教育懇談会では「郡内教育の振興策として地域的なものを取り入れた芸術大学の必要性も叫ばれたが、それまでの過程における短期大学設置問題については、賛否両論のまま今後の問題に残され」と報じている。都留文科大学への礎石が、こうした過程のなかで作られていったのである。